

---

# 送り屋無情

栗原峰幸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

送り屋無情

### 【Nコード】

N7215I

### 【作者名】

栗原峰幸

### 【あらすじ】

私立探偵・深町美雪のところの一件の依頼が舞い込む。それは事故死扱いされた父の真相を調べてほしいという娘からの依頼だった。一方、美雪には裏の顔があった。

女探偵、深町美雪のところへ一件の依頼が舞い込んだ。父の死に疑問を抱いた娘からの依頼である。

「警察の調べでは、単なる自損事故だつて言うんですが、納得できないんです」

麗佳はそう言って、父の死に関する調査の依頼をしてきたのだ。

美雪は主に浮気などの素行調査を専門としている。こうした依頼は初めてであった。

「お父様のお名前は？」

「鈴木健吾です」

「亡くなったのはいつ？」

「九月二日です。釣りに行った帰りでした。直線の高速道路で車がクラッシュして……」

「そう、お気の毒にね」

「でも、納得できないんです。父はトラック運転手として優良ドライバーだったんですよ。ハンドル操作を誤ることなんて考えられません。しかも、直線で……」

麗佳は悲壮な面持ちで、そう語った。美雪はボールペンを片手にメモ用紙に何か書いている。それは、退屈しのぎに描いているグチャグチャの円だ。

「一応は調べてみるけど、まあ警察が事故死つて言うんじやしょうがないと思うわ。あなたはこれから未来に向かって歩きなさい。それがお父様への一番の供養よ」

美雪はつまらなさそうにそう返した。

（ああ、今週も週末が近いわ。そろそろ獲物を探さなきゃ）  
美雪は心の中でそんなことを思っていた。

麗佳は「是非、よろしくお願いします」と言って、頭を下げた。その両目からは涙が滴っている。

(そんな涙、何の価値もないわよ……)  
美雪は心の中でそう呟いていた。

その日の晩、美雪は素行調査で荒木章吾という男を追い詰めていた。バーに呼び出し、浮気相手と仲良く腕組みしている写真を見せて付ける。

「これをいくらで買い取ればいいんだ？」

章吾はせせら笑いながら、交渉に持ち込もうとしていた。

「私の仕事は信頼関係で成り立っているの。この写真は売り物じゃないわ」

「じゃあ何故、写真を俺に見せるんだ。女房に直接渡せばいいだろう？」

章吾が訝しげな顔をする。

「さあ、あなたに興味があるから……かな」

美雪の口元がクスツと笑った。そして、身体を章吾に摺り寄せる。探偵のあんたが、俺に？」

章吾が美雪の顔をまじまじと見つめる。美雪は色気のある化粧を施し、物欲しそうな瞳で章吾を見つめていた。

「私もあなたが欲しくなっちゃったのよ。あなたを調べているうちにね」

章吾の喉がゴクリと鳴った。

「あんたの言うとおりにしたら、写真はくれるか？」

「いいわ……」

美雪が章吾の腕に腕を絡めた。

それから三十分後、美雪と章吾はホテルの一室にいた。ラブホテルではない、普通のシティホテルだ。

章吾は美雪の身体に齧りついている。薄いブランケットがガサガサと擦れる。

「おう、あんたの身体、最高だな」

美雪の上に乗った章吾が感嘆の声を漏らす。美雪はというと、喘

ぎ声も漏らさず、章吾の顔を見つめていた。

つかの間の情事が終わった後、ホテルのラウンジで章吾に浮気の証拠写真を渡した。その時の美雪の瞳はやるせなかつた。

章吾はというと、「これからもよろしく頼むぜ」と言いながら、満足そうに証拠写真を破いた。それにライターで火を点ける。こうして章吾の浮気現場の証拠写真は灰皿の上で燃えていった。

美雪も章吾も、その火を見つめた。

証拠写真が燃え尽きたところで、章吾は「じゃあ」と席を立った。「また、連絡をくれよな」

章吾は笑顔で、美雪に手を振った。美雪は表情のない顔で章吾を見送った。

その翌日である。章吾の妻から電話が入ったのは。

「主人が亡くなったんです。心不全で急に……」

「そう、それはご愁傷様です」

「あんな元気だった主人が……。信じられません」

「何か持病は？」

「まったくありませんでした。私、これからどうしていいの……」「気をしっかり持ってくださいね。人間、一寸先は闇ってことですよ。それからね、ご主人の素行調査の結果はシロでしたよ。浮気はしていませんでした」

美雪がそう言った途端、章吾の妻が泣き崩れた。涙声で「ありがとうございまして」と言っている。

「調査費用は結構ですよ。何も成果がありませんでしたし、あなたもこれからご主人の葬儀とかで、何かと入用でしょうから……」「うつつ、きつと主人のことを疑った罰が当たったんですわ」

章吾の妻は泣きながらそう言った。

(そう、罰ね……)

美雪は心の中で呟いた。

電話を切った美雪はペーパーナイフを弄びながら、物思いに耽っ

ていた。別に章吾のことを思っていたわけではない。ある初老の紳士のことを思い出していたのだ。

その初老の紳士とはバーで出会った。紳士は美雪の隣に座ると、ジントニツクを美雪に奢ってくれた。美雪がお礼を言うと、紳士は目を三日月のようにして笑った。

紳士は会話が巧みだった。美雪の知らないようなことや、美雪の質問を先回りして答えてくれたのである。

「君は男好きする顔だな」

二人がすっかり打ち解けた頃、ふと紳士が美雪の顔を覗き込むようにして言った。

「わかる？」

「わかるとも、この歳になればね。しかも君は一人の男じゃ満足しないだろう？」

「そうね。私にも好みはあるけど、できれば世界中の男を虜にしてみたいわ」

「なるほどね。私じゃダメかね？」

美雪は紳士を見た。歳はとっているが、清潔感あるその雰囲気は美雪に好印象を与えた。

「いいわよ。だいたいバーで私が一人で飲んでいる時、隣に座る男は身体的なんだから……」

紳士はニヤリと笑った。

その後、美雪はホテルで紳士に抱かれた。紳士は美雪を抱いた後、言った。

「君の男好きを仕事にしてみないか？」

「あら、あなたはそちらの筋の方だったの？ これでも私立探偵をしているの。風俗の真似事は御免だわ」

美雪はつまらなそうに答えた。だが、紳士は美雪から視線を逸らさなかった。むしろ、食い入るように覗き込んできた。

「そうじゃない。今までどおりでいいんだよ。ただ一週間に一人ずつ違う男に抱かれるんだ」

「何それ」

「その男は君に抱かれてから二十四時間以内に心不全で死亡する。その謝礼として、一人につき百万円払おうじゃないか」

「馬鹿な。誰が信じるのよ、そんな話……」

「信じるも信じないも、君はもう『嫌』とは言えないんだよ」

紳士の目には恐ろしいほどの殺気が籠っていた。

「あなたは一体、何者なの？」

「私はモノグサな死神だよ」

「じゃあ、もし私が男に抱かれなかったら？」

「その時は君が死ぬのさ」

紳士は笑った。その目からは殺気は消えていた。だが瞳は笑ってはいなかった。

それから、美雪は試しに自分へストーカーまがいの行為を繰り返していた男を誘い、抱かれてみた。すると、翌日にその男は心不全で急死したのだった。美雪は慌てて銀行で自分の講座を確認した。すると、確かに百万円が振り込まれていたのだ。振込み人は「送り屋商会」となっていた。紳士が言っていた。美雪のような仕事をこなす人間を「送り屋」と呼ぶのだそうだ。冥土に送るから「送り屋」なのだとか。

美雪は背筋が寒くなる思いがした。だが、これは現実なのだ。となると、一週間以内にまた別の男に抱かれなければならない。でなければ、自分が死ぬのだ。

美雪はもう男を心から愛せない身体になってしまったことを理解した。

それからというものの、どれだけの男に抱かれ、殺してきただろうか。

時には行き連れの男に抱かれたこともある。章吾のような素行調査の対象の男に抱かれたこともあった。

美雪は相手に対する同情を一切捨てた。なるべく相手とは深く関わらないようにし、抱かれていたのである。だから、身の上話など

は聞かないようにした。情にほだされて殺せなくなつては困るからだ。

その「送り屋稼業」の見返りとして、美雪は巨万の富を得た。私立探偵の仕事にそれほど熱を入れなくても、十分豪勢な暮らしができた。美雪を飾っている衣類からジュエリーの数々は、どれも一流品だ。

美雪はダイヤのリングに目を遣った。その輝きも男の命の代償かと思うと、今では魅力的に輝きを増して見える美雪だった。

「さてと……」

美雪は腰を上げた。気は進まないが、鈴木健吾の事故死について調べねばなるまい。

「多分、ただの事故死だと思うけど……。猿も木から滑るのよねえ」  
今では「送り屋」の隠れ蓑として私立探偵を続けている美雪であった。

美雪は警察に赴いた。交通安全課を訪ねると、若い安浦という刑事に話を聞くことができた。

「ああ、鈴木健吾ね。事故死した」

「娘さんから、調査の依頼がありました……」

「本当は守秘義務があるから、話はできないんだけどね。あんた美人だから、特別に教えちゃう。あれは事故死でもかなり不審なんだよなあ。車のどこにも異常はない。かといって、直線の高速道路だ。そこで突然クラッシュするとはねえ。普通じゃ考えられないね」  
「どこからか狙撃された形跡とかは？」

「あー、そんなのないない。兎に角、不思議な事故つてことだけは確かだね。まあ、言えるのはここまで」

「そうですか……」

「あー、そういえば、確かその前の八月二五日の自損事故も新甲丸の乗客だったな……」

「新甲丸？」



「釣り船だよ。金沢八景から出ている乗り合いの……。まあ、関係はないと思うけどね、探偵なら一応は当たってみたら?」

「その前に亡くなった方のお名前は?」

「高島吉蔵さんだったかな」

「ありがとうございます」

美雪は深々とその刑事に頭を下げ、警察を後にした。

(新甲丸……。当たってみる価値はありそうね……)

事務所に戻った美雪は新甲丸なる釣り船をインターネットで調べた。主にカサゴをメインに乗り合い船を出しているらしい。出船時間は朝の七時半で午後三時には帰港するらしい。とりあえず新甲丸の住所と電話番号を控えた美雪は、金沢八景に向けて車を走らせた。

「鈴木健吾さんに高島吉蔵さんね。知ってるよ。うちの常連だったんだけど、二人とも亡くなったの?」

船長は船の掃除をしているところだった。棧橋で美雪は船長に九月二日の鈴木健吾の様子を聞くことと思ったのだ。

「当日は結構混み合っていてね。そういえば、鈴木さん、オマツリばかりしていたな」

「オマツリって何ですか?」

「ああ、釣り糸同士が絡み合うことだよ。混雑したり潮が速かったりすると、どうしてもオマツリが増えるんだ」

「他に変わったことは?」

「特にないねえ……。しかし、鈴木さんも高島さんも事故死なんだから? 二人重なったのは単なる偶然じゃないかな。帰りには道が混むからね」

船長は甲板をデッキブラシで擦りながら、神妙な顔つきをしていた。

「そう、偶然ね……」

「あっ、そうだ!」

突然、船長が叫んだ。何かを思い出したようだ。

「これも多分、偶然だと思っただけど、鈴木さんも高島さんも、丁度胸の間だよ。市川さんの隣だったな」

「胸の間って何ですか？」

「船の中央、丁度船長室の脇辺りのことだよ。あまりベテランには歓迎されない席だね。ベテランは船首のミヨシか船尾のトモを選ぶからね。まあ、うちは来た順番で席取りをするんだけど、市川さんはいつも胸の間だな。まあ、稀に胸の間が好きって人もいるんだがね」

「すみません、当日の乗船名簿を見せてもらえますか？」

「ああ、だったら女房に頼んで」

美雪は掘っ立て小屋のようなプレハブの受付で、九月二日と八月二十五日の乗船名簿を見せてもらった。その両日とも市川俊樹という男が乗船していた。他に重なっている釣り人は見受けられなかった。美雪はとりあえず、市川俊樹の住所と電話番号をメモした。

美雪は帰り際に、新甲丸の駐車場も入念に調べたが、特にこれと違って不審なものはない。

「はあ、やっぱり単なる偶然よね」

そう呟くと、美雪は車に乗って事務所へと戻った。

事務所に戻った美雪はパソコンを開き、市川俊樹の名前を検索サイトで検索する。すると様々な情報がそこには載っていたが、『市川俊樹の沖釣りブログ』なるブログがあることを発見した。それを開いてみると、確かに九月二日と八月二十五日に新甲丸で、彼は力サゴを釣り上げている。八月二十五日の釣果はそれほど振るわなかったようだ。九月二日はまあまあと記載されている。

「やっぱり、有益な情報はないわね」

美雪はブログの記事を遡る。市川俊樹なる男は毎週のように沖釣りに出掛けている、無類の釣り好きのようだ。

「新甲丸の前が茅ヶ崎のひまご丸か……」

俊樹は八月十九日に茅ヶ崎のひまご丸からライトタックル五目と

呼ばれる船に乗っていた。

「無駄だと思っけど……」

美雪は電話の受話器を持ち上げると、警察に電話を掛けた。そして安浦刑事を呼び出してもらう。

「ああ、八月の二十五日にも事故はありましたよ。やはり釣りの帰りの客で、確か茅ヶ崎のひまご丸だったかな。津川博之という方が亡くなっています。これも自損事故でしたね。いや、このところ、釣り帰りの客の事故が多いなあ」

安浦刑事はあっけらかんと答えてくれた。

「車に異常とかはなくて？」

「いや、どの事故も車に異常は認められませんでしたね。完全にドライバーの不注意です」

その答えに美雪は肩を落とす。もしかしたら、市川俊樹が車に何か細工を行ったかとも思っただのだから。

「また、何かありましたら、よろしくお願い致します」

そう言っ、美雪は電話を切った。

鈴木健吾と高島吉蔵と津川博之の自損事故死。それは市川俊樹という男と同じ釣り船に乗り合わせたという線で繋がった。だが、証拠が何も無い。

「偶然と考えるには、あまりにも不自然だね。確かに市川俊樹には何かある」

それは私立探偵としての勘だった。しかし、ただ船に乗り合わせただけで、どう自損事故に持っていきえるのだろうか。それが疑問だった。警察は車に異常はないと言っていた。とすれば、市川俊樹が車に細工をした可能性は低い。

「市川俊樹が無謀運転で事故に導いた？ でも、何のために？」

美雪は早めに自宅へ戻り、熱いシャワーを浴びた。身体を洗いなから、自分を繁々と眺める。

（この身体……、この身体でどれだけの男をあの世に送ったかしら

?)

豊かな乳房はいつも男たちを虜にしていた。そんな自分が可笑しかった。

(毎週、男を殺している私が、市川俊樹を気にするなんて……)

だが、相反するように、探偵としての血が騒ぐのだ。

美雪がシャワーから上がって、バスローブのままリビングでくつろいでいると、不意に電話が鳴った。受話器を上げると、電話の主はあの安浦刑事であった。

「どうもすみません。自宅にまで電話しちゃって……」

恐縮して安浦刑事が言う。

「どうして自宅の電話番号がわかりました？ 名刺には事務所の番号しか載せていなかったはずだけど……」

美雪が少し強めの口調でそう言うのと、安浦刑事は「あっ」と言うて、言葉に詰まった。

「まあいいわ。警察は職権で何でもできますものね」

美雪が皮肉たっぷりに言った。安浦刑事は口ごもる。

「で、何かわかりました？」

「ええ、市川俊樹という男がどうも絡んでいるらしいんです。何の証拠もないんですが……」

「市川俊樹のことならば、私も調べているところですよ」

「え、そうなんですか？」

「確かに証拠は何もないわね。動機だつてまるでわからない。ただ死んだ人たちは市川俊樹と同じ船に乗り合わせただけ……」

「そう、そうなんですよ。後は共通しているのは市川俊樹とオマツリをしたらしいんですね。動機と言えばそのくらいかなあ」

「オマツリ……」

「そうなんですよ。詳しいことは、これから一杯やりながらどうですか？」

美雪は苦笑いをこぼした。どうやら、安浦刑事の本心はそこにあるらしい。

「いいですよ。行きつけのバーがあるんです。そこでどうですか？」  
「バーですか。さすが美雪さん、お洒落ですね。私なんか居酒屋しか行ったことはありませんよ」

美雪は安浦刑事を不器用だが真面目な男だと思った。そんな男に付き合つて酒を呑むのも悪くはなかった。

「では、後ほど……」

美雪は余所行きの服に着替え、入念に化粧を施した。

(シャワーを浴びた後なのに……)

そんなことも思ったが、安浦刑事の爽やかな笑顔を見られるかと思うと、女の本能が黙つてはいなかった。

程なくして、バー「トランゼ」のカウンターに美雪と安浦刑事の姿を見ることが出来る。安浦刑事は緊張していることが見て取れた。

「まずは乾杯しましょ」

美雪はジントニック、安浦刑事はドイツ仕込みの生ビールだ。グラスがカチンと鳴った。

「で、オマツリがどう関係してるの？」

いきなり美雪は本題に入った。

「それですよ。オマツリっていうのは釣り人にとって一番厄介な問題ですね。釣り人同士のトラブルの元にもなるんですよ」

「ふーん、そうなの……」

「市川俊樹がひまご丸に乗った日も、オマツリが頻発していたらしいんです。何しろ市川はサバを狙っていたらしいんですよ。しめさばを作りたいと言つて」

「サバとオマツリとどういう関係があるのかしら？」

「サバって奴は針に掛かると、横に走るんです。当然、隣の人ともオマツリをする」

「じゃあ、隣にいた人って……」

「津川博之です」

美雪の中に新たにオマツリという線が繋がった。それは安浦刑事

も同じだろう。

「オマツリってそんなに厄介なことなのかしら？」

「仕掛けがダメになっちゃうことが多いですね。何しろ釣れている時には時間のロスになりますから……」

安浦刑事が腕をこんがらせて、おどけて見せる。その仕草が可笑しくて、美雪はプツと笑ってしまった。

「いやー、バリバリの女探偵、深町美雪もそんな笑い方するんですね。ずっとクールを決め込んでいるのかと思いましたよ」

「あら、私だつて人間なのよ」

「あ、これは失礼しました」

謝るその姿が爽やかな安浦刑事だった。美雪はそんな安浦刑事を目を細めて見つめた。

「でも、刑事さん。本当のところは市川俊樹のことを喋りたくて、私を誘ったんじゃないでしょうか？」

「参ったなあ……」

安浦刑事が照れくさそうに頭を掻いた。

「そして、私はあなたに興味を持っている……」

「え？」

安浦刑事は目を丸くした。その爽やかな好青年を殺すには惜しかったが、この男と命の炎を燃やすのも悪くはないと思う美雪であった。

「ホテルに行く？」

美雪のその言葉に、安浦刑事の顔がほころんだ。

「実はホテル、予約してあるんです」

安浦刑事は照れくさそうに言った。

そこは以前に章吾に抱かれたシティホテルだった。そのラウンジに一人のでっぷりと肥えた中年がいた。安浦刑事がその中年に近づく。

「お約束どおり、深町美雪を連れて参りました」

「ちょっと、どういうこと？」

「ああ、署長がちょっとね、あなたに聞きたいことがあるって……」  
「署長？」

美雪が中年の男を見下ろした。でっぷりとした体格に、いかにもふてぶてしそうな仏頂面だ。

「君が深町美雪君だね」

署長は野太い声で美雪を見上げた。その視線は絡みつくような、いやらしい視線だった。

「君の噂は聞いているよ。名探偵だってね。で、うちの安浦が君に捜査情報を漏らしたようですね。実は君に私が直々に取調べをさせてもらおうと思ってる」

「だったら、警察署で取り調べればいいことでしょう？」

美雪は所長と安浦刑事を交互に睨んだ。

「そんな無粋で、色気のない取調べはせんよ。こういうホテルでじっくりと話を聞きたいと思ってね」

署長が舌なめずりをした。

「いいわ。その代わり、謝礼は弾んでもらうわよ。それと、安浦さんとはここでお別れよ」

「無論、そのつもりだ」

署長が立ち上がった。美雪は署長を睨み付けた。

(安浦さん、命拾いしたわね……)

美雪は心の中で呟いた。

署長は美雪の全身を舐めるように眺めている。既に股間は膨れ上がっていた。そんな署長を見て、美雪の中の「送り屋」の本能が目覚めた。

(こんな男、冥土に送ってやるわ……)

署長の愛撫は執拗だった。これほど粘り気のある男を今まで美雪は知らなかった。時間をかけ、美雪を嬲るはらであった。

「ほら、もっといい声を聞かせてくれよ」

署長が美雪の股間に顔を埋めながらねだった。署長の愛撫は執拗ではあったが、美雪に快樂はもたらさなかった。

「御免なさい。私、あんまり感じない性質なの。業を煮やした署長が美雪に覆いかぶさった。」

そこから長かった。色々な男を経験してきた美雪ではあるが、署長は様々な姿勢を美雪に要求したのである。でつぷりと肥えた腹が、美雪の身体にタプタプと当たった。

美雪はただ、時間が早く過ぎることを願っていた。

翌日の昼過ぎ、美雪の事務所に安浦刑事が現れた。

「昨日は失礼しました」

美雪は安浦刑事を睨んだまま、返答をしなかった。ペーパーナイフを弄びながら、ただ安浦刑事を睨みつけていた。

「署長が死んだんです。急性心不全だそうで……」

「いい様なこと」

安浦刑事は真っ直ぐに美雪を見つめられなかった。

「で、何か用？」

「はい。一応、昨日の夜のことをお伺いしようかと思いましたが……」

「冗談じゃないわよ。あんな蝦蟇蛙みたいな奴のことなんか、思い出したくないわよ。金で女を買った報いがあったのよ。あいつの財布、空にしてやったけど、署長の割に随分と少なかつたわねえ。でも警察署長が買春とはねえ」

「すみません。これも一応仕事なので、昨夜のことを聞かせてもらえませんか？」

美雪は立ち上がると、ツカツカと安浦刑事の前まで歩み寄った。

そして、ネクタイを掴む。

「あなたは交通安全課でしょ。殺人は強行班の仕事じゃなくて？」

「そ、そうなんですが、昨夜のことは何分……」

「じゃあ、私も話すことはないわ。帰って頂戴！」

そう言うと美雪は安浦刑事を突き倒した。安浦刑事はただ頂垂れ



ている。

「署長の身体から薬でも検出されたの？」

「いいえ、何も……」

「じゃあ、私に何も用はないはずよ。さっさと帰って頂戴」

安浦刑事は立ち上がると、「失礼しました」と言つて、去つていった。そのくたびれた背中を美雪は憎悪の籠つた目で見送つた。

「さてと……」

美雪は安浦刑事を追い出し、満足はしていなかった。その心の中に棘のように引つ掛かつているのは署長との昨夜の情事ではなかった。署長の死はまさに「してやったり」と思つている美雪であった。その美雪の心に引つ掛かる棘とは、市川俊樹がことだった。

「オマツリ、オマツリねえ……」

美雪は物思いに耽る時、必ずペーパーナイフを弄ぶ。それは癖だった。

不意に電話が鳴つた。電話の主は鈴木健吾の娘、麗佳だった。

「どうですか。調査に進展はありましたか？」

「こつちも行き詰つているよ。何しろ、警察が事故死扱いしているんですもの。手がかりが少なくなつて……」

「そうですか。あのー、今更なんですけど、父のことはもういいです」「何ですって？」

「事實は知りたいですけど、後ろばかり見てちゃダメだなと思つて……」

「そうね。私もこの案件は厄介だから取り下げてもらつと楽だけど、でも本当にそれでいいの？」

美雪はペーパーナイフを弄びながら、視線を宙に泳がせた。

「はい……。死んだ父は戻りませんし、これから未来のことを大切にしようと思つて……」

「ふーん……」

美雪はつまらなさそうに答えた。それは商売が不調に終わるから

ではない。ここまで来るのに、美雪は不本意ながら警察署長に身体まで売ったのだ。それに、ようやく掴みかけた市川俊樹なる人物も宙に浮いてしまう。それを許すのは探偵の血が許さなかったのだ。「でもね、少しだけ進展はあったのよ。お父様が釣りに行って乗った船で隣にいた人、その人が何かしら絡んでいるかもしれないの。まあ、証拠は何もないんだけどね」

「えっ、どんな方ですか？」

「そんなの知らないわよ。私は直接、会っているわけでもないし……」

「名前と住所、連絡先、わかりますか？」

「今までの調査費用を払ってくれたら、お教えするわ」

それから一週間が過ぎようとしていた。

美雪が次の獲物を探そうと、入念に化粧を施し、夜の街に出掛けようとした時だった。不意に自宅の電話が鳴った。

(無粋な電話なこと……)

美雪に嫌な予感が走った。気は進まなかったので受話器は取らなかった。すると、不在時のアナウンスが流れ、メッセージを入れられるようになる。

「もしもし、安浦です。鈴木健吾さんの娘さんの麗佳さんが今日の午後四時に亡くなりました。父親の時と同じ自損事故です。どうやら市川俊樹と一緒に釣りに行ったようですが、その帰りでした。釣り船は金沢八景の三番瀬丸です。どうやら、シロギスを釣りに行ったようなんです……」

そこで自動録音は切れた。慌てて美雪は受話器を取る。

「ああ、何だ、美雪さんいたんだ」

「ちよつと、安浦さん、どういうこと？」

「今、留守電に入れたとおりです。麗佳さんが亡くなりました。父親の時とまったく一緒です。直線の高速道路でクラッシュして……。巻き添えがなかっただけ、マシでしたね」

「鈴木健吾の時と同じ……。もうちょっと詳しく教えてくれない？  
バー『トランゼ』で待ってるわ」

「あ、会ってくれるんですか？」

「いいから早く来て」

そう言つて、美雪は受話器を置いた。

（麗佳さんに市川俊樹の連絡先を教えるんじゃないわ。それにしても市川俊樹はどうやって……？）

バー「トランゼ」に安浦刑事が到着したのは、美雪がジントニツクを半分ほど飲んだ頃だった。

「あ、今日もばっちりお化粧、決まっていますねえ」

安浦刑事は笑顔を作りながら、美雪の隣に座った。そして、黒ビールを注文する。

「どうして、どうして市川俊樹の隣に座った釣り人はみんな死ぬの？ それも全部事故死……」

「私に聞かれたってわかりませんよ。そちらの方が調査も進んでいるんじゃないんですか？」

安浦刑事は黒ビールをチビツと舐めて、困ったような顔をした。

「で、市川俊樹と麗佳さんはシロギスを釣りに行ったのね。麗佳さんは釣りをする趣味など持っていないなかったわ。きつと、市川俊樹に接触を図ったのよ」

「誰かが市川俊樹の存在を麗佳さんに教えたんだな。真相を確かめようとして、麗佳さんは市川俊樹と釣りに行った……」

安浦刑事は腕組みをして考え込んだ。美雪は悲痛な面持ちで残り少なくなったジントニツクを見つめている。

「私が教えなければ……」

「え、美雪さんだったんですか？」

「依頼を断る電話が麗佳さんからあったの。最後の仕事のつもりで市川俊樹の住所と連絡先を教えたんだけど……。こんなことになるなんて、思ってもみなかったわ」

「そうだったんですか……。まあ、こればかりは仕方がないですよ。あまり自分を責めないでください」

美雪には不思議だった。いつも「送り屋」として、数々の男を殺しているのである。それなのに、麗佳の死にこれだけ動揺している自分がいる。自分の気持ちをどう整理してよいのか、まったくわからなかった。

「市川俊樹と麗佳さんは多分オマツリしたんでしょうね」

「オマツリってそんなに大変なことなの？」

美雪は安浦刑事の顔を覗き込んだ。すると安浦刑事はバッグの中からプラスチックケースに巻かれた釣り糸を二つ出した。

「あら、安浦刑事も釣りをなさるの？」

「はい、下手の横好きってやつで……。署内の年休消化率はナンバーワンですよ」

安浦刑事はプラスチックケースから糸を引き出すと、釣り糸の一つを美雪に渡した。そして、それをグチャグチャに絡めあう。

「どうですか？ 解けますか？」

「確かにこれは難しいわね……。こんなのを釣り場でやられたら、イライラするかもしれないわ」

その釣り糸はもつれ合い、こぶになっている部分もあった。美雪には知恵の輪を解くより難しいと思われた。

「市川俊樹はそのオマツリを頻繁に起こしていた……。そして隣の釣り人は事故死する」

安浦刑事は深刻そうな顔をして、もつれた釣り糸を眺めていた。

「それにしても、私たちの周囲ではよく人が死にますねえ。先週は署長が死んだし……」

安浦刑事がため息をついた。美雪はふと思う。市川俊樹も自分のような「送り屋」ではないかと。オマツリをした人間が事故死をする。そんな「送り屋」がいても不思議ではない。かつて初老の紳士は「送り屋」が多数いることをほのめかしていた。

「署長の話はもうしないです。思い出したくもないんだから……」

美雪は自分が冥土に送った男のことを思い出さなくはなかった。

「あ、これは失礼……」

安浦刑事がまた黒ビールを舐める。美雪は残っていたジントニックスを一気に飲み乾した。そして、お替りを注文する。

「先日のこと、まだ怒ってますよね？」

安浦刑事が恐る恐る尋ねてきた。

「安浦さんは人がいいからね。署長に脅されたんでしょ？」

「わかります？ 実は私、署長が死んでホッとしてるんですよ」

安浦刑事がはにかんだように笑った。美雪もフツと笑った。

「はーあ、本当はあなたと寝たかったのに……」

「すみません。期待を裏切っちゃって……。今更じゃ遅いですか……

…ね？」

安浦刑事が美雪の瞳を覗き込んだ。美雪は真剣な眼差しで安浦刑事を見つめ返す。

（この人、私の仕事に首を突っ込み過ぎているわ……。でも、悪い人じゃない）

そんなことを思う美雪であった。一時は美雪を売った安浦刑事だが、お人よしは変わらなかつた。爽やかな笑顔も、以前のままだ。そんな爽やかな好青年の命の炎は何色かと思う。きつと、限りなく透明に近いクリスタルのような色をしているのだろうか。それが燃え尽きる瞬間を見てみたい気もする。それは美雪の「送り屋」としての本能がそう思わせているのかもしれない。

「いいわ。ホテルに行きましょう」

美雪がジントニックスを煽って、席を立った。安浦刑事の顔がほころんだ。

（今週の獲物こそ、あなたよ。安浦さん……）

美雪は心の中で呟いた。

シティホテルの一室で、美雪と安浦刑事はもつれ合っていた。

「ああ、美雪さん……」

「ああ、安浦さん……、きて……」

夢中になって美雪に齧りつく安浦刑事。美雪は珍しく、自分が「喘ぎ声」を漏らしていることに気付いた。

「はあっ、ああっ、いい、安浦さん……」

普段は死に行く男の顔を眺めながら、喘ぎ声など漏らさぬ美雪であった。ただこの時は、少し気の弱く、誠実そうな好青年に抱かれ、美雪もまたその心に火が点いたのだろう。

安浦刑事は誠意を込めて抽送を繰り返す。その度に美雪の中の女が悦びを感じていた。

「ああっ、安浦さん、頂戴！」

美雪は髪を振り乱しながら叫んでいた。

長いとも短いとも言える耽美な時間が終わっても、二人はベッドの中でもつれ合っていた。

「ねえ、安浦さんは星占いを信じました？」

「いやー、私は占いはダメなんですよね。よく星座を聞かれるんですが、自分はいつもオリオン座と答えているんです。古代の勇者オリオンみたいな強い男になりたいなって思っただけ。まあ、人間なんてそう簡単に変わるもんじゃないですけどね」

美雪はクスツと笑った。

「私はね、蠍座なの……」

「へえー、『毒』を持っていらっしゃるんですね」

「古代ギリシア神話で勇者オリオンは慢心のあまり、最後は蠍に刺されて死んだのよ」

「あ、知ってます。その話……。だからオリオン座は冬の星座、蠍座は夏の星座って棲み分けしてるんですね」

安浦刑事が屈託のない笑顔で笑った。

「安浦さんもお人よしだから……。蠍の毒には気を付けた方がいいわ」

美雪が意味深に笑った。

「私はお人よしなんかじゃないですよ。いつも市川俊樹と一緒に釣

りに行ってますからね」

「えっ？」

「市川俊樹と私は、実は釣り友達なんですよ」

今度は安浦刑事が妖しい笑みを湛えている。

「だって、乗船名簿には安浦さんの名前なんかなかったわよ」

「ああ、あんなのいくらでも偽名を使えますよ」

誠実だと思っていた安浦刑事の顔が、美雪には途端に狡猾な男の顔に見えた。

「それにね……、うっ！」

安浦刑事が途端に胸を押さえて、もがき苦しみだした。

「ぐわーっ、心臓が焼けるように痛い！ 助けてくれーっ！」

安浦刑事は胸を押さえ、七転八倒している。美雪は狼狽した。

（まさか、こんなに早く死期がくるなんて……。二十四時間以内という話は聞いていたけれど……）

それは現実だった。安浦刑事は呻きながらベッドの上を転がっている。その全身からは脂汗が吹き出していた。

美雪はジッと安浦刑事を見つめていた。自分が抱かれた男の死を見届けるのは、これが初めてであった。

安浦刑事の目がカツと見開いた。と思うと、彼はまったく動かなくなつた。

（さようなら、安浦さん……）

美雪は安浦刑事の死に顔をまじまじと見つめると、おもむろに着衣しはじめた。乱れた髪を整え、部屋を出る。警察に連絡する義理はなかった。警察から多少の尋問は受けるだろうが、安浦刑事は心不全という自然死を迎えたのだ。美雪には自分が疑われる要素はないと判断していた。

美雪は部屋を出ると、エレベーターホールへ向かった。そこで下りのエレベーターを待つ。

「はあ」

美雪はため息をついた。今まで数々の男を殺してきた美雪だが、安浦刑事だけは後ろ髪をひかれる思いがあったのだ。

（しかし、安浦さんと市川俊樹が釣り友達とは……。麗佳さんが死んだ日も一緒に行ったのかしら？）

そんなことを考えていると、エレベーターが停まり、美雪の前でその扉を開けた。他に客はいなかった。美雪一人でエレベーターに乗り込む。

美雪は一階のボタンを押すと、壁に寄りかかった。扉は静かに閉まった。

（署長に次いで安浦さんか。ちょっと、面倒なことになりそうね……）

そんなことを思った瞬間だった。急にブチツと何かが切れる鈍い音がした。次の瞬間、美雪の身体は宙に浮いていた。そして、次の瞬間には思い切り美雪の身体は床に叩きつけられた。

ここで美雪の意識は途絶える。いや、正確に言えば、美雪がもう二度と起き上がることはなかったのである。そう、彼女は死を迎えたのだ。

ホテルのロビーには沢山の人でごった返していた。エレベーターの前にみんな集まっているのだ。

「エレベーターのワイヤーが切れたんだってよ」

「何でも若い女が死んだそうだ」

「しかし、エレベーターのワイヤーが切れるなんて、そんなこと、普通はあり得ないけどなあ」

人ごみの後ろ、ロビーで新聞を眺めている男がいた。初老の紳士だ。その顔はどこか浮かない。

「あーあ、送り屋同士が引き合うなんてなあ……。さて、次を探すとするか。何しろ地球上に人間は蔓延り過ぎたわ」

初老の紳士は新聞を畳むと、仏頂面でホテルのロビーを出て行った。その横を駆けつけた警察が通り過ぎていった。



3

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7215i/>

---

送り屋無情

2010年10月8日15時26分発行